

ISSN 0910-2396

野鳥だより

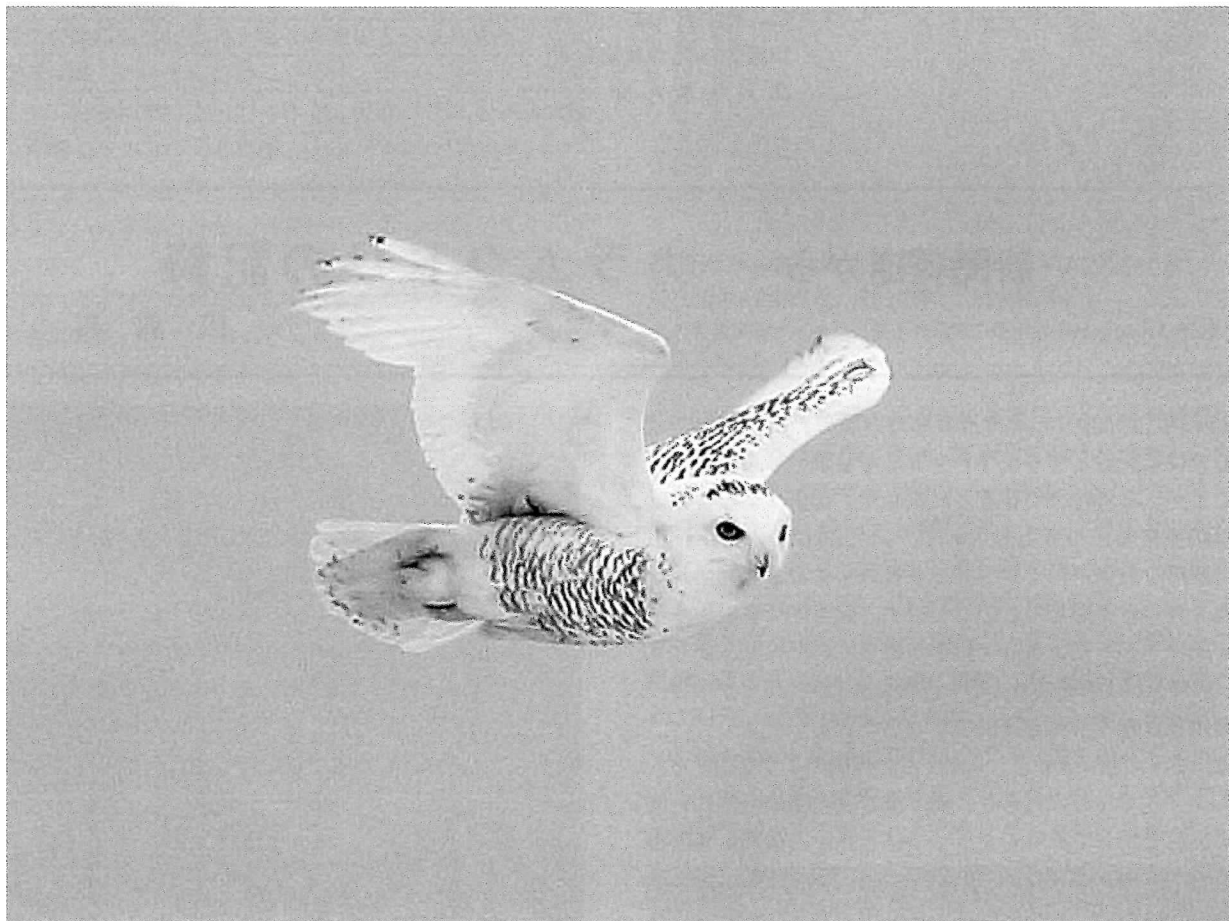
—北海道—

北海道野鳥だより第175号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成26年3月21日

シロフクロウ



2013. 12. 22 稚内市

撮影者 泊 和 幸 (天塩郡遠別町)



も く じ

— 新聞報道から — カラムクドリの記録	広 報 部	2
札幌におけるオシドリの繁殖		
NPO法人真駒内芸術の森緑の回廊基金・日本オシドリ研究会	新田 啓子	3
庭にやってきたヤマヒバリの報告		
日本野鳥の会室蘭支部	寺山 聡	5
北の大地のアカゲラと、南の島のノグチゲラ(1)北大キャンパスのアカゲラ研究		
森林総合研究所九州支所森林動物研究グループ	小高 信彦	6
シマアオジの危機状況、さらに深刻に！ IUCNのレッドリストから		
北海道立総合研究機構 環境科学研究センター	玉田 克巳	8
探鳥地紹介 石狩川下流自然再生地区		
札幌市北区	樋口 孝城	9
シラガホオジロ・オオモズ観察記	富良野市 大坪 和憲	11
シルバ通信② 雪どけを待つ河原の鳥たち		
北海道大学農学院	藪原 佑樹	12
シロフクロウとの出会い	天塩郡遠別町 泊 和幸	13
探鳥会ほうこく		13
鳥民だより		15
宿泊探鳥会のお知らせ		15
探鳥会あんない		16

— 新聞報道から — カラムクドリの記録

広 報 部

2013年11月29日の北海道新聞地方版に、根室市内で北海道では初記録となるカラムクドリが目撃・写真撮影されたことが、写真付きで報道されました。記事によると撮影者は根室市在住の青山豊さんで、11月24日の午前中、市内有磯町を散歩中にツルウメモドキの木にとまる見慣れない鳥を見つけ撮影したとのこと。記事中に春国俗ネイチャーセンターによるコメントが載っていたので、同センターの仲介により青山さんから直接お話を聞くことができ、新聞掲載以外の写真も提供していただきました。

青山さんの話によると、ムクドリの仲間のような感じで、コムクドリぐらいの大きさ、翼と尾が黒い他は全体に灰白色で、もしかしてカラムクドリではと思い、写真を春国俗ネイチャーセンターのレンジャーの方に見てもらったところ、間違いないだろうということになったそうです。これまでに北海道では記録がないということで新聞社に連絡し、掲載の運びとなりました。実際の写真はカラーで、嘴と足は青灰色、虹彩は灰白色であることも認められます。今回掲載のモノクロ写真でも、翼と尾が他の部分とは明瞭に濃いことがわかります。写真には木の枝の影が写っていますが、識別の妨げにはなっていません。

なお、青山さんの話によると、青山さんより先に、おそらく同一と思われる個体を目撃した人がいるとのことですが、公表はされていないようです。

カラムクドリは東アジアから東南アジアに生息しますが、

琉球諸島（沖縄島、宮古島、石垣島など）では冬鳥として時々見られるようです。九州以北には迷行種として稀に飛来する程度で、鳥嶼を除く本州では千葉県が記録のある最北とされています（日本鳥類目録改訂第7版、日本鳥学会、2012）。

今回は東北地方どころか、北海道の大部分を越えて根室に出現しました。あまりにもかけ離れた場所ですから、もしかして籠脱け（飼育個体の逸出）という可能性はありますが、カラムクドリの飼育は考えにくく、やはり何らかの理由による迷行とした方が良いのではないのでしょうか。



カラムクドリ 2013. 11. 24 根室市 青山豊さん撮影

札幌におけるオシドリの繁殖

NPO法人真駒内芸術の森緑の回廊基金・日本オシドリの会 新田 啓子

道内で見られる色鮮やかな鳥といえば、カワセミ・オオトリ・キビタキ・キレンジャクが思い浮かぶが、オシドリには敵わないのではないだろうか。帆のようにピンと立つ橙色のイチョウ羽、脇の黄褐色と白黒のしま模様、胸の紫と首を覆う筋状のひげ、赤い嘴と白く平らな顔面、頬のうっすらオレンジのシャドーと後ろにたなびく冠羽。絶妙な色のバランスと構成が完璧。しかも水の飲み方が上品で、非の打ちどころがない。その上自然界で白い顔は暗がりによく目立ち、目を閉じると顔も白いので白壁のよう。なぜそこまで美しいのか。もしかすると、♂：♀=150：100の性比が関係しているのかもしれないと、ふと思う。オシドリは厳しい競争に打勝つために、ツタンカーメン兜をまとっているのではないだろうか。オシドリは♀のみで抱卵・育雛するので、「その間、オシドリはブラブラしてずるい！」と憤慨していたこともあったが、「オシドリは、それなりに大変なのかもしれない」と最近同情できるようになった。

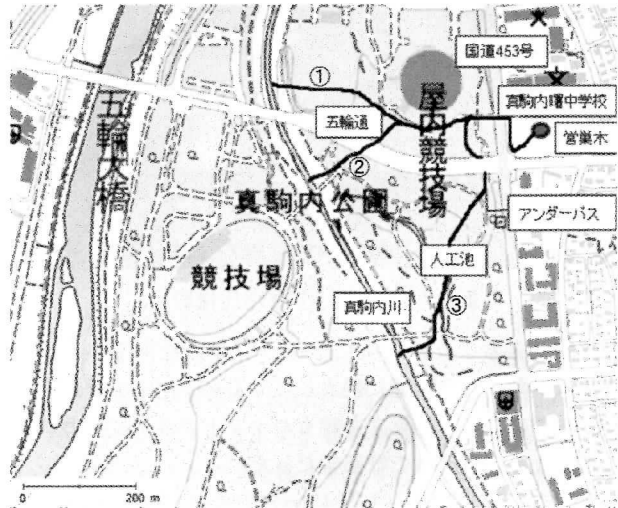
真駒内曙中学校の校庭の真ん中にあるハルニレでオシドリが営巣していることがわかったのは、2005年、NHKがエゾモモンガの取材中であった。



曙中学校のハルニレ 谷上裕二氏撮影

珍客の喜びもつかの間、それからが大変であった。何時巣立つか？ 巣立ち後どこに向かうか？ 中学校は四方道路に囲まれているが、無事に道路を横断できるのか？ 知識や情報がなく、手探りの状態であった。国道横断に関して「自然に任せればいい」という意見もあった。しかし、国道453号は交通量が多く、交差点にも近いので交通事故回避のためにも警察官に交通整理をお願いすることになった。国道横断は、警察の協力のお陰で成功し、真駒内公園に入った。その後、五輪通のアンダーパス方向に親子の後方から手で追って誘導すると、2005年に営巣した♀親は比較的温厚だったようで飛ばずに従い、親子はアンダーパスをくぐって五輪通の南側に着き、人工池に向かった。途中

ハシブトガラスが飛来して来ると、付き人たちは雛を守るために人情的に咄嗟に追い払っていた。



営巣木から真駒内川までの移動ルート。①2010年、②2007～2009年、2012年、③2005年。

この背景図等データは、国土地理院の電子国土Webシステムから配信されたものです

2006年は繁殖せず、2007年に営巣した♀親は神経質で、人が近づくと飛んでしまい、雛が散り散りバラバラになってしまった。このことから、人の誘導に応じた2005年の♀親が例外で、本来は神経質な鳥ということを知らされた。何とか国道を横断してから南方向に進み、交通量が多くない五輪通の縁に身をひそめ、機を待った。一列になって♀親の判断で横断し始めた。車が近づいていたので危機一髪であったが、無事に横断でき、川に繋がる草むらに入った。2008年の巣立ち時、♀親から離れた場所に下りた雛1羽が、営巣木の枝に止まって雛を狙っていたハシブトガラスに襲われた。校庭での行進中もハシブトガラスが親子の行く手に飛来し、ヒヤヒヤしたが、♀親は口を大



校庭を行進中にカラスが飛来！ 長谷部育絵氏撮影

大きく開けて威嚇し、みごとに追い払った。これらのことから、「雛は一塊になって母親から離れなければ安全。交通量の多い国道453号の他は、人は手助けしなくていい」ということがわかり、母親の力量を信じて、巣立ちを安心して



巣立ちの様子 小原聡氏撮影

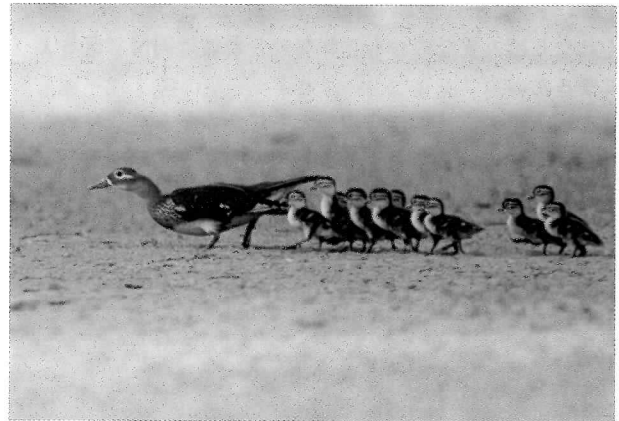
て観察できるようになった。2010年は、校内でハシボンガラスが営巣し、校庭に侵入してくるハシブトガラスを追い払っていたので、巣立ち時もハシブトガラスに襲われることがなく、かえって好都合だった。

オシドリは、全長(L)45cmのカモの仲間。L59cmのマガモより二回り小さい。♀は地味で、目の周りにアイリングがあり、白いラインが後方に伸び、嘴の脇にもある。♂の特徴は赤い嘴で、夏羽は鮮やかで美しい。食性は草食に近い雑食で、ドングリが大好き。アカナラの大きなドングリの実も丸呑みしている。その他、昆虫やミミズを見つけると、素早く捕まえ、食する。抱卵期間中の♀は、短



朝帰巣の様子 中央の円内に親鳥雌雄
筆者撮影

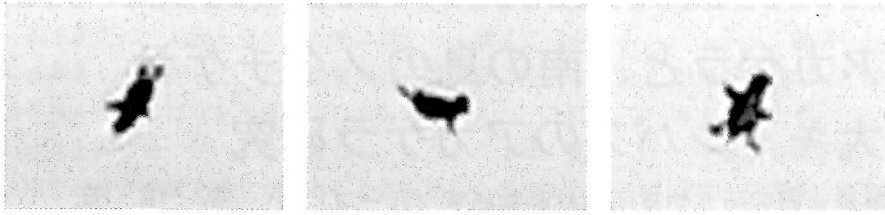
間に昆虫等の動物質、草類やドングリ等の植物質をバランスよく順に食べていた。北海道では夏鳥だが、まれに越冬する個体がいる。札幌には3月下旬から4月上旬に飛来し、営巣地が雪解けすると巣探しを始め、産卵期を経て約30日間の抱卵期に入る。巣立ち後、♀は約2か月間、育雛する。♂は、他の♂や抱卵に失敗した♀と集団を作る。その後、冬羽(非繁殖羽)に換羽し、♂は♀のような地味な羽になるが、嘴が赤いので識別できる(エクリプス)。さらに夏羽(繁殖羽)に換羽してから越冬地に渡る。つがい形成時期は、早いもので渡り前の秋、遅いもので春飛来してからと思われる。そして、ある時期までにつがい関係が解消されるので、1ペアのつがい関係期間は7ヶ月間以内のようだ。産卵は36時間周期で、7~10個の卵を10~15日間で産む。産み終えると♀は羽毛を抜いて敷き、♀のみで抱卵する。抱卵期間中の♀は通常朝夕の2回、約1時間ずつ、採餌に出巣する。オシドリは樹洞に営巣する森林性の水鳥。本来は自然度の高い水辺に近い森林に営巣していたと思われる。条件のよい営巣地が減少し、森林での営巣が困難になり、市街地の巨木のある緑地で営巣するようになった可能性は大である。



行進の様子 谷上裕二氏撮影

真駒内曙中学校の校庭のハルニレにおいて、出巣時刻(巣を出る時刻)と帰巣時刻(巣に帰る時刻)を調査し、巣立ち日を予測した。その際、抱卵期間約30日と2005年の事例(巣立ち前日夕方と当日朝に出巣しなかった)を参考にした。オシドリは警戒心が強いので、距離を置いて調査圧をかけないように注意した。2006年を除く2005~2012年の出巣時刻や帰巣時刻や出巣時間(巣を出ている時間)の変化に各年で特徴があり、相違はあったが、巣立ち前日の夕方の出巣時間が抱卵期間中の平均より短く、巣立ち直前に朝夕の出巣時間が急激に減少した。この2点より翌日の巣立ちが予測できる可能性がある。それは雛が孵化し、母親の出巣時刻や出巣時間に変化が生じたためと考えられる。

巣立ち時の雛は、母親に必死に付いて行っている。それは母親の指示と雛の本能の結果と思われる。昨年(2013年)中央区の公園で巣立った雛の顔が妙に変なのに気が付いた。目の下のラインが太く濃く、まるで「下ぶちメガネ」をかけたようで、妙におやじ臭かった。そこで、過去の雛を列



巣立ち時に飛び降りる雛たち 筆者撮影

挙してみると、濃い雛が各年にいた。雛の成長とともに薄くなるようであるが、濃い理由は今後の課題である。

巣立ち後まもない雛の羽は、めちゃ小さく、天使の羽のよう。巣立ち39日目での羽ばたきは、まだ力なかった。巣立ち46日目になると、羽ばたきが本格的になり、体が少し宙に浮いた。巣立ち52日目の雛は、少し飛べるようになったが、岸で躊躇する個体も多く、バタバタ羽ばたいて勢いをつけてから、ようやく飛び立っていた。しかし飛ぶコツを覚えると上達は早く、巣立ち61日目になると軽々飛べるようになっていた。

2005年当初は、「♂がきれいで、孵化後まもない雛は、地上高い樹洞から飛び下りる」くらいの知識しかなかった。あれから9年弱。オシドリに関する論文を発表しているとは夢にも思わなかった。毎年少しずつ分かってきたが、新

たな疑問な点が出てきて、次年度の課題となった。産卵シーンの観察は数年越しにようやくできた。また観察を重ねると、その個体の繁殖の段階が見当つき、今何をし、次の行動が少し読めるようになった。もちろん予想外の動きもあり、それはそれで

興味が尽きない。HDDビデオカメラの進歩は助かっている。しかし暗がりでは撮影した映像は、等倍で確認しなくてはならず、時間がかかる。朝3時起きで観察に出かけ、帰ってから午前中いっぱいビデオカメラデータの整理、夕方また観察、という非人間的な生活が、4月中旬～7月中旬まで3ヶ月間続く。習慣になると3時起きも辛くないが、マンネリ化し精神力を維持するのがけっこう厳しい。

そんな折、北海道野鳥愛護会から新年講演会の講師と、今回の原稿執筆依頼のお話をいただきました。まとめるのに時間を要しましたが、とても励みになり、感謝しています。北海道野鳥愛護会は創立45周年、会員数は300名以上の大所帯とお聞きました。新年講演会後にお招きいただいた懇親会も盛大で、今後ますますのご繁栄を期待しています。

庭にやってきたヤマヒバリの報告

日本野鳥の会室蘭支部 寺山 聡

2013年11月29日午前10時頃、我が家の庭に前夜からうっすらと降った雪の上に、シジュウカラにまじって見慣れない鳥がいるのを発見。

庭にはヒマワリと脂身の二つのエサ台を設けています。ヒマワリの殻が地面にたくさん落ちていたので、それをついばんでいたものと思われます。庭には沈丁花の木が一本あり、始めは警戒してその茂みからなかなか姿を見せません。姿を現しても動きは素早く速いです。

12月14日午後、久しぶりに再び姿を現し、その後も下旬にかけて時々姿を見せてくれました。少し慣れたのか、ヒマワリのエサ台でシジュウカラ等と一緒に、エサをくわえてすぐ木の茂みに入り込み食べているようでした。

今年に入り1月上旬にも時々姿を見せ、12、14、15、16日と連続して観察しましたが、17日からはシメが多数来ていたせい、その後3～4日間は確認していません。この原稿を書いた1月20日も現れたので、11月29日から継続して庭の周辺に留まっ

ていたものと思われます。

私の家は室蘭市崎守町にある小高い丘の麓に位置し、海から約1kmの距離にあります。裏手はヒバの林になっていて、エサ台のある表玄関側の庭はオンコ、松、ツツジ等で多少混んでいる状態です。すぐ隣にも家がありますが、表通りからは少し入って静かなところではあります。



ヤマヒバリ 2013. 11. 29 室蘭市

北の大地のアカゲラと、南の島のノグチゲラ

(1) 北大キャンパスのアカゲラ研究

森林総合研究所九州支所森林動物研究グループ 小 高 信 彦

昨年遅く、NHKのBSプレミアムでのノグチゲラ番組放送を北海道野鳥愛護会ホームページの「野鳥情報伝言板」に紹介させていただいたことをきっかけに、久しぶりに広報部の樋口孝城さんよりご連絡をいただき、「北海道野鳥だより」への寄稿のお誘いをいただきました。ここでは、私が北海道で研究していたアカゲラと、現在研究しているノグチゲラについて、研究を進めるにあたってお世話になった方々とのエピソードなども交えながら2回に分けて紹介させていただきたいと思います。

アカゲラは世界に約200種生息するキツツキ科鳥類の中でも、最も広い分布域を持つキツツキです。西はイギリスから東は日本まで生物地理区の旧北区ほぼ全域に分布し、アフリカ大陸北部やカナリー島、中国海南島まで生息しています。好適な環境であれば他のキツツキと比べても生息密度が高く、都市緑地や防風林など、森林があれば人里近くまで様々な環境で姿を見せてくれるキツツキです。アカゲラは世界のキツツキの中でも最も私たちの生活に身近なキツツキといえるでしょう。私は北海道大学大学院に在学中、札幌市街地のエルムの森、北大キャンパスに暮らすアカゲラを研究対象に選んで研究生生活をスタートさせました。森林の分断化がアカゲラの生息地選択や社会行動に与える影響を解明することが研究テーマでした。

幼少時代を過ごした大阪で小学校の先生にバードウォッチングに連れて行ってもらってから鳥が好きになりました。初めてのバードウォッチングで見たコゲラのシルエットは今でも鮮明に覚えています。北海道大学に入学して、憧れのキツツキだったアカゲラに大学構内で出会えた時は、「こんなに身近なところにいるんだな。」と、とても驚きました。大学院に進学して、指導教官の小野有五先生のすすめで鳥の研究をすることになり、キツツキが子供の頃から好きだったこともあって、都市緑地で暮らすアカゲラの研究することに決めました。キツツキは木に自ら巣穴を掘って子育てをするため、ある程度以上大きな木がないと生息できません。また、餌場となる森林の面積や分布が、生息できるかできないかに大きな影響を与えます。幅広い環境に生息するアカゲラは、森林の分断化の影響を研究する材料として、都市緑地と自然林の比較研究ができる有利な研究対象です。また、キツツキの掘った巣穴は、自分で巣穴を掘ることができないモモンガなどの樹上性哺乳類や鳥類など多くの生き物に利用されます。森林生態系の中で樹洞生産者という役割を担っているキツツキであり都市緑地にも

生息するアカゲラが、身近な森の生物多様性を支えていることも忘れてはなりません。

大学院の研究テーマを決めた頃は、子供の頃から「野鳥観察は鳥の迷惑にならないように」と教えられてきたので、研究のためとはいえアカゲラを捕まえてカラーリングを付けるという作業は、とんでもないことのように思われました。しかし、大学院修士課程の研究計画を立てている頃、初めてお目にかかった、当時、帯広畜産大学にいらした藤巻裕蔵先生に「足環があるのと無いでは全く情報量が違いますよ。」と助言を頂き、一念発起してアカゲラを捕獲しカラーリングにより個体識別して調査することにしました。当時、森林総合研究所北海道支所にいらした川路則友さんに野鳥の捕獲標識調査を体験させていただき、初めてのバンディングで網から外したアオジの感触は今でも手に残っています。また、東京大学農学部秩父演習林まで出かけていって、アカゲラを飼育されていたキツツキ研究の先輩である石田健さんにキツツキ調査のノウハウを教えて頂きました。学部時代は鳥の研究とは畑違いの分野にいた私にとって、次のアカゲラの繁殖期までに残された時間はわずかでした。とにかくその道の専門家に直接会ってお話を伺うのが一番の近道と思い、北海道や日本各地を飛び回って、活躍されている鳥類研究者のもとを訪ねて多くの方から助言を頂きました。ちょうど森林総合研究所北海道支所に転勤されてきた松岡茂さんとは共同研究をすることもできました。自由に他大学や外部の研究機関との交流をすることができたのは、私の指導教官だった北海道大学院地球環境科学研究科の小野有五先生の後押しと、受け入れてくださった多くの先輩研究者の皆さまのおかげでした。

1994年、いよいよ北大キャンパスのアカゲラを捕まえてカラーリングをつけて観察を始めたところ、驚くべきことがわかりました。これまで一夫一妻で繁殖すると考えられていたアカゲラが、一妻二夫のトリオで繁殖していたのです。この観察事例では、それぞれ自分のなわばりと巣を持つ2羽のオスと、1羽のメスがつがいとなり、メスはそれぞれのオスの巣に卵を産み子育てしていた（同時の一妻二夫）のです。これは大発見と興奮し、とにかく調査によって巣を放棄させないように、距離をおいてじっくり観察しました。当時所属していた北大野鳥研究会や大学院の研究室の多くのメンバーにも観察を手伝って頂き、2つの巣を同時観察してトランシーバーで「今、こっちの巣にメスが来たよ！」などと探偵まがいの調査も行いました。メスの手伝いが少ない中でもそれぞれに巣を持つ2羽のオス

はともによく働き、片方の巣では丸一日メスが訪れず、オス親1羽だけでお腹を空かせた雛に餌を与え続けている日もありました。そして、北大教養部から恵迪寮に抜ける道路を挟んでなわばりを形成していた2羽のオスと、これらのオスと同時につがいになったこのメスのトリオは、見事に両方の巣から雛を巣立たせることに成功したのです。身近な森での大発見に興奮し、そのまま博士後期課程への進学を決めました。また、当時、北海道大学の大学院生で石狩平野のモズの研究をされており、今は大阪市立大学で先生をされている高木昌興さんに、アカゲラの一妻二夫の初記録について「小高、IBIS行けるよ!」と言って頂き、思い切って投稿してみることにしました。IBISはイギリスの国際鳥類学雑誌で、多くの鳥類研究者にとってあこがれの雑誌です。観察を英文で短い報告にまとめて、高木さんの言葉を半信半疑に思い切って投稿しました。すると、編集者より、とても重要な観察とのお返事を頂き、その後無事、IBISに掲載されました。1998年のことでした。

多くの鳥は、一夫一妻で繁殖します。ウグイスのように一夫多妻で繁殖する鳥も知られていますが、一妻多夫で繁殖する鳥はタマシギやレンカクなど、数えるほどしか知られていません。それでは、このアカゲラのメスはなぜ、2羽のオスと同時に2つの巣を構えることができたのでしょうか?その理由の一つは、オスとメスの子育てへの関わり方にあると考えています。アカゲラのオスはとても働きもので子育てにも積極的に参加する、いわゆる「育メン」です。アカゲラは、通常の一夫一妻で繁殖する場合、雌雄交替で巣穴を掘り、抱卵、抱雛を行い、雌雄ともに雛への給餌を行います。さらに、オスはメスよりも長い時間巣穴を掘り、日中の抱卵・抱雛は雌雄交替で行いますが、夜間巣穴に残って卵やヒナを抱くのはオスの役割です。メスは、日没近くになると、子育てをしている巣穴とは別の場所に

ある自分のねぐらへと帰っていきます。メスはオスの積極的な子育て参加のおかげで、夜間巣穴をオスに任せることができるため、2羽のオスと同時につがいになれたのだと考えられます。

一妻多夫制が知られているタマシギやレンカクなどの鳥類は、早成性の雛を持つことが知られています。これらの雛はふ化後数日以内に巣を離れ、親鳥の後について歩き回るようになります。つまり、手のかからない子供と、よく働くオスのおかげで、メスが複数のオスとつがいになる一妻多夫制が成り立っています。キツツキの仲間が多くの場合一夫一妻で繁殖するのは、キツツキ類の雛がふ化したばかりの時は赤裸で目も開かず、自力で飛べるようになるまでに数週間を必要とする晩成性で、両親の協力による子育てが繁殖成功を高めるうえで重要だからだと考えられます。都市緑地との比較のため、アカゲラにカラーリングをつけた同様の調査を、札幌市郊外の羊が丘(森林総合研究所と北海道農業試験場)や、苫小牧演習林の連続した森林で行ったところ、観察することができたすべての巣で、一妻一妻で繁殖していました。アカゲラの一妻二夫を発見した北大キャンパスのような都市緑地では、森林が孤立化し不均質に分布するため、狭い森に巣が集中するような環境で、オスのなわばりの質にも差が生じます。初めの発見後も北大キャンパスでは複数の一妻二夫のトリオによる繁殖が観察されたことから、都市緑地のような森林が極度に分断化した環境条件で一妻二夫のトリオが生じやすくなるのではないかと考えています。

博士後期課程3年目の冬、博士論文執筆にむけてかなり悩みこんだ時期もあったのですが、多くの方に支えられ、長野冬季オリンピックの原田選手や清水選手の金メダルに励まされ、そして、心の準備もできていなかったのですが、小野先生からは「予備審査の日取りが決まったから」とゴールを設定して頂き、なんとか博士号を取得することができました。博士号をとった1998年、当時の環境庁(現環境省)が、絶滅危惧種ノグチゲラの保護増殖事業計画を策定しました。この事業計画の調査では、これまで明らかになっていなかったノグチゲラの社会や寿命などを明らかにするため、ノグチゲラでは初めての標識調査が行われることになっていました。私がアカゲラにカラーリングをつけて研究を行っていることを知っていた石田健さんに声をかけて頂き、1999年3月、キツツキ研究者として、ノグチゲラ標識調査に参加することになりました。

今回は、南の島の常緑広葉樹林、沖縄島北部やんばる地域に暮らすノグチゲラの研究について紹介します。



地上に降りて餌をとるアカゲラのオス(2013年7月帯広市、撮影:鳥飼久裕さん)。普段はもっぱら樹上にいるアカゲラも、林縁や公園などでは地上に降りる姿を見かけることがある。

シマアオジの危機状況、さらに深刻に！ IUCNのレッドリストから

北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 玉田 克巳

昨年9月、名古屋市で日本鳥学会の大会が開催されました。今年の夏は東京で国際鳥学会が予定されていることから、ここ数年、学会自体、国際色が強くなってきているのを感じます。この辺のこともあってか、名古屋の大会では、久しぶりにバードライフ・アジアのシンバ・チャン氏が参加しており、少し話す機会がありました。開口一番、彼から「IUCNのレッドリストでシマアオジのランクが上がるよ」と教えてもらいました。

以前にもこの野鳥だよりで紹介しましたが、IUCNとは国際自然保護連合の略称で、世界中の生物のレッドデータを公表しています。ただ、IUCNがすべての分類群の生物について生息状況の評価を行っているわけではなく、鳥類の場合は、バードライフ・インターナショナルという別組織がレッドリストを策定し、これがそのままIUCNに採用されています。そしてチャン氏の所属するバードライフ・アジアは、バードライフ・インターナショナルの下部組織です。

学会から戻り、何度かIUCNのホームページで状況を確認しました。9月の時点ではシマアオジは、まだ従来どおりのVu（環境省RDBのカテゴリーと照らすと絶滅危惧Ⅱ類に相当する）というレベルであったものの、しばらく後にEn（環境省RDBでは絶滅危惧ⅠB類に相当）レベルになっていました。情報の更新日は2013年11月1日でした。レッドリストのランクが上がるということは、行政をはじめとするさまざまな機関が、保全対策を講じてくれる可能性が高くなります。この点では歓迎されることです。しかしランク付けは、ある程度客観的な情報をもとに行われるもので（ホームページで紹介されている内容は後述）、こ

の点では、状況はさらに深刻になったと思われます。

とき同じくして、12月の中旬に、国内の研究者仲間から別の情報が入りました。日ロの研究者会議でシマアオジのことが話題になり、西ロシアで分布域が急激に縮小していることが紹介されたとのこと。やはり、状況は深刻になっているようです。

では、IUCNのホームページの情報をもう少し詳しく紹介しましょう。判定の理由は、比較的簡潔に述べられていますが、要約すると、「地域的には多いところもあるが、個体群が全体的に激減少しているためにEnに指定した。減少の主な理由は非繁殖地での捕獲である」と断定的に書かれています。各地の状況として紹介されている主なものは以下のとおりです（それぞれ参考にした情報源が付いていますが、ここでは省略しました）。参考までに紹介されている地名の位置を図1に示しました。また、シマアオジの世界分布を図2に示しました。

- フィンランドでは2009年から繁殖記録がない。
- エルティシ川流域など、カザフスタンのいくつかの地域では減少していない。
- ヨーロッパロシアでは2000年から2010年にかけて、少なくとも70%が減少したと推定され、モスクワ地方、ノヴゴロド地方、コストロマ地方、ウリヤノフスク地方、バイカル地方では減少実態が報告され、チュメニ地方でも2011年に減少している。
- 西シベリアのチュメニ州で2012年と2013年に行われた調査では、ほぼ完全に消失し、西シベリア全体で激滅している。

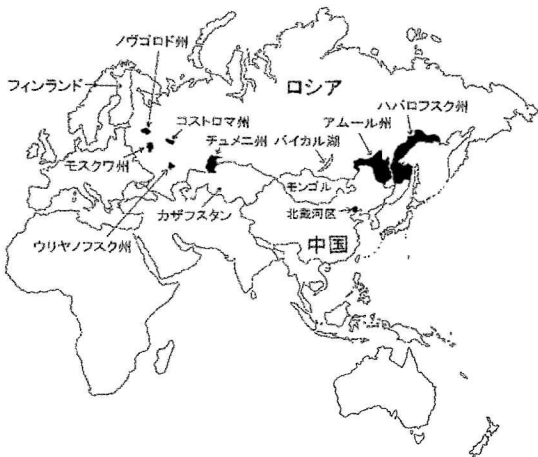


図1. 生息情報のあった地域の位置図

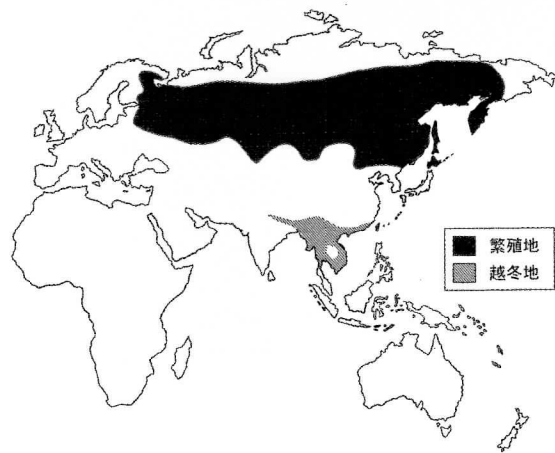


図2. シマアオジの世界分布

- 繁殖域の東側に位置するアムール地方と ハバロフスク地方の保護区の内外で行われた調査では状況はよく、ムラビオフカ公園 (6,500ha) では2013年に100-150つがい繁殖していた。
- 北海道やモンゴル国でも減少についての報告がある (Tamada 2006など)。
- 中国の北戴河区 (ほくたいがく) などの中継地での観察地点では大きな群れが見られなくなっており、過去の20年間で越冬地での個体数も急激に減少している。
- 越冬地であるカンボジアでは、明らかに減少している。
- カンボジアにおいては、過去に中央平野では普通種であったが、近年、トンレサップ地区ではほとんど見られなくなり、プノンベン河畔のメコン・バサック氾濫原で、1990年代中ごろから激減している。
- カンボジア南東部では、1990年代後半から観察情報がない。これは個体数が減っていることが示唆され、この地域から消滅かそれに近い状態になっている可能性がある。
- ネパールでは、この地域に生息している個体群が1990年以降減少している。
- バングラデシュ北東部のハイリハオール湿原? (場所がわからない) においても、1980年代中ごろから減少がみられている。
- 非繁殖地では、観察情報が断片的であり、かつ大きな群れの出現することがあるため、生息実態の解明がむずかしい。

繁殖地のみならず、越冬地や中継地の情報も紹介されていて、状況はかなり深刻であると思われます。しかも、情報が比較的新しいことが特徴です。少し残念なのは、引用

されている情報がほとんど「非公式な情報源に基づく交信」によるものということです。つまり、シマアオジの情報を更新するにあたり、かなり広い地域の方々から情報収集はしたけれど、論文や報告書のような客観的で、かつ公表されている情報ではないので、検証できる情報源ではないと思われることです。

「減少の原因」の項目では、以前にこの紙面で紹介したような中国での捕獲のことが記述されていますが、加えて、カンボジアやネパールでも捕獲されていることが紹介されています。「保全活動に向けた提案」では、3つのことが提案されています。①減少実態を明らかにするために、繁殖地、中継地、越冬地で、広域の共同調査の実施。②広報活動を通じて、シマアオジの食糧化、マスコット化などの需要を減らすこと。③越冬地での生息地に関する緻密な調査と、現在多数が越冬している地域の保護区化。

北海道でも、最近では、十勝の池田キモント一付近に生息していたシマアオジが2011年から姿を消しました。ウトナイ湖南東岸にわずかに生息していた個体も2012年から見られなくなっています。北海道の個体群も、まさに風前の灯火です。今回の情報から、シマアオジは北海道だけではなく、世界中でかなり深刻な状況にさらされていることがうかがえます。

なお、今回紹介した内容は以下のホームページに記載されたものを和訳したものです。

<http://www.iucnredlist.org/details/22720966/0>

文献

Tamada K (2006) Population change of grassland birds over ten years in Nakashibetsu, eastern Hokkaido. *Ornithol Sci* 5:127-131.

探鳥地紹介 石狩川下流自然再生地区

札幌市北区 樋口孝城

北海道開発局は石狩川・当別川合流点周辺で (図1)、沼、湿地、河畔林を人工的に造り、かつての自然を再生する事業を「石狩川下流当別地区自然再生事業」と名付けて2008年度から始めました。当該地区には事業開始の数年前に石狩川浚渫工事に伴う排泥地が造られ、その跡地である沼や湿地ではカモ類やシギ・チドリ類などの水鳥が観察されていました。また、周囲では草原の鳥たちも見られました。

排泥地造成により大きく変わってしまった状態を、単にそれ以前に戻すだけではなく、ずっと昔の原始の状態を再生しようというのが根幹目的ですが、このことについては、この事業のためのワークショップ座長であった辻井達一さ

ん (昨年ご逝去) が野鳥だよりの第153号 (2008) に“水と生きものの郷・トゥ・ベツ”というタイトルでご紹介されています。

自然再生のための事業工事は2014年度をもって一旦終了し、以後は環境状況の推移を見守るということになりましたが、これに伴い、4箇所ある入口のゲートの施錠をやめ、車で自由に入ることができるようになるということです。2013年度までの施錠の理由は、工事が行われていたということもありますが、「ゴミ捨ての問題」です。車で自由出入りを許すと、トラックなどで入り込んで大量のゴミが捨てられる恐れがあるというものです。でも、折角の場所をできるだけ多くの人達に楽しんでもらうためには、

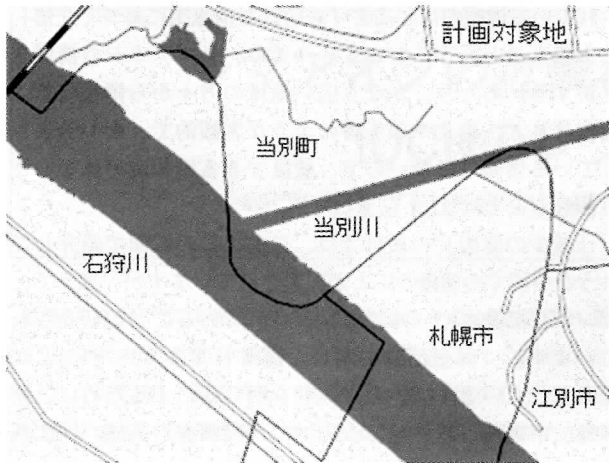


図1. 石狩川下流当別地区自然再生実施地区

その恐れがあるとしても、まずはやってみようということになりました。

ゲートの錠は今年の4月からなくなります。ゲートそのものはありますが、ちょっと持ち上げると開閉できるようになります。出入りの度に開閉作業が必要なのですが、かなり広い区域ですから、車で入れるようになるのはとてもありがたいことです。ただ、10月からはまた施錠されます。これは10月1日からの狩猟解禁を考慮したものです。この地区は禁猟区ではないので、これまでは狩猟自粛をお願いしていました。10月1日以後も鍵をかけないでくと、2007年以前のように、多くのハンターがカモ類を狙って入ることになるだろうことを避けるためです。10月はカモ類の移動の最盛期ですが、狩猟とのからみがあり、難しいところです。取りあえずはやむを得ない措置と思います。徒歩での出入りはできますから、ちょっと頑張って歩くのも身体のためかもしれません。

図2に地区全体の概要を示します。図自体は「構想図」で、現状状況とは違っていますから、だいたいの感覚で見て下さい。図の真ん中にある当別川を基準として、左側を当別川「右岸側」、右側を当別川「左岸側」と呼んでいます。



図2. 地区全体の概要（構想図）

図とは左右が逆です。どちらも石狩川右岸にあたります。左下にあるのが石狩川公園です。ゲートの場所を矢印で示しています。

右岸側、石狩川公園に近いゲートから入ると、石狩川岸にある人工ワンドのところに出来ます。その次のゲートからは当別川に沿って石狩川になります。それぞれ1本道で、先でつながることはありません。まだ草丈が高くない時期であれば、石狩川に沿って歩けます。

左岸側は放水路の横のゲートから入っても、その次のゲートから入っても石狩川近くにある大きな水場に出ます。道が細かく枝分かれしていることはありません。

両岸側とも道は工事用道路をそのまま残したものですから、複雑ではありません。一般車の通行はありませんから、どこにでも止められます。車から降りて草藪を歩くために、今年度からは春と秋に適当な道筋を造るための草刈が開発局によって行われます。どこに草刈道をつけたらいいかは、前以って伝えておく予定です。

雪に閉ざされていた冬が終わり、4月に入ると多くの鳥たちがやってきます。氷が解けた水面には多数のコハクチョウ、カモ類が集まります。5月になると草原性の夏鳥



左岸側に造成された沼の近くに並ぶダイサギの群れ 2013. 11. 9

が来ます。また、春の渡りのシギ・チドリ類も見られます。7月下旬になると、鳥暦ではもう秋です。草原の鳥たちはまだまだ残っています。左岸側の水場の岸边では秋の渡りのシギ・チドリ類が見られ始めます。9月になるとまたカモ類が集まってきます。

10月になると車では入れなくなるのですが、左岸側の水場は堤防道路からでも見渡せます。徒歩で入るのもいい

でしょう。昨年(2013)の11月には50羽を越すダイサギが並んでいました。手稲方面の山々、札幌市北区あいの里のマンション群を背景に、なかなか結構な眺めでした。

ここではあえて詳しいことは書きませんでした。何はともあれお出かけ下さい。何をもって「自然再生」というかは難しいところですが、草原の鳥、水辺の鳥を楽しめることは確かだと思います。

シラガホオジロ・オオモズ観察記

富良野市 大坪 和憲

夫婦でバードウォッチングしながら、自然の風景や野鳥撮影を楽しんでいる富良野在住の大坪和憲と申します。

昨年10月28日、芦別岳と紅葉を撮影するために近隣の山部方面に出かけた時のことです。

山部12線の農道で、路肩の茂みから飛び出した小鳥を発見、双眼鏡で覗くと久しぶりのカシラダカでした。

慌てて望遠レンズを装着し、撮影を開始したところ、カシラダカとはちょっと様子の異なる個体が混ざっていました。頭上と耳羽が白く、体上面は茶褐色で黒褐色の縦斑があるシラガホオジロでした。シラガホオジロは4年ほど前、観察する機会があったのですが、撮りそこない、今回初撮

りできてとても嬉しかったです。

翌日、翌々日と土地所有者の農家さんに許可をいただき連日観察に出かけました。

車が通ると茂みから飛び出しますがじきに戻ってきます。シラガホオジロとカシラダカの混群で10羽ほど、茂みの中や刈り取った後の田んぼで採餌していました。

2週間ほど過ぎた11月11日、さすがにもういないだろうと思いながらも行ってみると、なんとシラガホオジロが



写真1. シラガホオジロ雄



写真2. シラガホオジロ雌

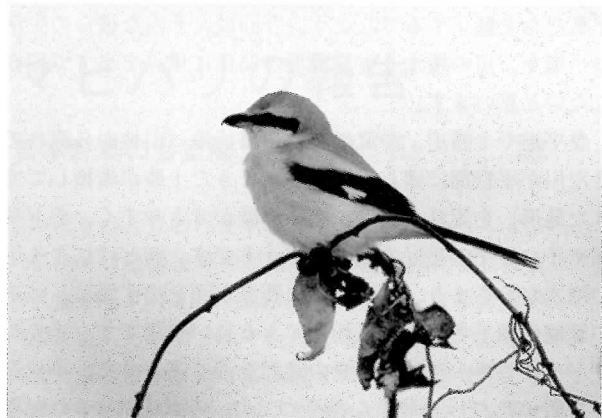


写真3. オオモズ

まだいました。しかも同じ場所にオオモズまで現れました。カシラダカは渡去したのか見ることはできませんでした。

11月16日、札幌の知人と一緒に観察、茂みから飛び出し、そばの木に止まった時、21羽のシラガホオジロを数えることができました。

11月17日、18日と旭川、中富良野の知人がシラガホオジロとオオモズを観察しています。

11月19日に出かけてみましたが、シラガホオジロ、オオモズを確認することはできませんでした。

いずれにしても約3週間この場所に留まっていたことになり、十分に楽しませてくれました。来年度以降も来てくれることを願っています。

シラガホオジロ、オオモズとも国内では稀な旅鳥または冬鳥として渡来し、道内でも観察記録があるようです。

シルバ通信②

雪どけを待つ河原の鳥たち

北海道大学農学院 藪原 佑樹

長く厳しい北国の冬にも、ようやく春の兆しが見えてきました。冬の間降り積もった雪は、朗らかな春の陽を浴びてとけだし、山肌を伝って下流の川に注いでいます。雪どけが本格的に進む4月下旬から5月にかけては、北海道の川が一年のうちで最もダイナミックな姿をみせる時期です。土砂や栄養分を豊富に含んだ濁流が押し寄せ、川の水位を激しく変動させるのです。雪どけによる川の増水は融雪洪水とよばれ、北海道をはじめとする多雪地域の川では、毎年みられる春の風物詩です。

轟々と流れる春の川を訪れると、川面すれすれに飛ぶ地味な姿の鳥が目にとまります。川辺の鳥を代表するイカルチドリやイソシギです。これらの種は、川が運んできた砂や石ころが広がる河原を好んで生息し、川と密接に関わって生活しています。地味な外見とは裏腹に、彼らのユニークな繁殖生態—イカルチドリやコチドリの独特の求愛ダンスや、捕食者からヒナを守る親鳥の懸命な偽傷行動、危険を感じたヒナの河原の石への擬態など—は、知れば知るほど私たちを魅了するでしょう。今回は、そんな彼らの生活の一端を、川の増水と生息環境の関係に焦点を当てて紹介したいと思います。

豊平川や十勝川、沙流川などの扇状地（山地から流れてきた川が平野部に達し、運搬されてきた土砂が堆積してきた地形）を流れる川は、広い河原ができやすく、チドリ類やイソシギの絶好の観察スポットです。雪どけによる川の増水がおさまると、水面の間に河原が顔を出す頃は、彼らの繁殖の様子をつぶさに観察できる良い時期です。イカルチドリやコチドリは、河原の地面を浅く窪ませて、小枝などを敷いただけの簡素な巣をつくり、平均して4つの卵を産みます。これらの種は、植物がほとんど生えない開けた河原をとりわけ好んで営巣します。一方のイソシギは、植



ヒナを連れて河原を歩くイカルチドリ。ヒナはふ化した後、数時間で歩きまわる。ヒナの背中の模様は河原の石ころにそっくりだ。

物がまばらに生えた河原を好み、草木の根元に枯れ草を集めて粗雑な巣を作ります。また、河原に流れついた倒木の下には、同じく河原で繁殖を行うセグロセキレイがしばしば巣を作ります。河原の鳥たちは、種ごとに異なる環境を利用して営巣しますが、植物の生え方が異なる場所があったり、倒木があったりして多様な環境を持つ河原では、多くの鳥を同時に見ることができます。

チドリ類やイソシギが繁殖する広い河原は、上流から運ばれてくる土砂と、川の増水によって維持されています。雪どけや台風によって大規模な川の増水が起こることで、河原に生える草や若い樹木は洗い流され、新たな砂や石ころが運ばれてくるのです。皆さんの中にも、大規模な洪水が起こった後、川の景観が一変して広々とした河原が目立つようになった、と感じた経験を持つ方も多いのではないのでしょうか。

先ほど述べたチドリとイソシギのすみわけにも、川の増水が役買っています。増水が起こって河原が水に浸ると、しばらくの間は植物が生えないため、イカルチドリやコチドリの格好の営巣場所となります。水に浸ってから数年が経ち、植物がまばらに生えてくると、今度はイソシギが利用します。このように、イカルチドリやイソシギの生息環境は、川の増水と深い関わりがあります。時に氾濫して、私たちの暮らしに大きな打撃を与える川の増水ですが、彼らにとっては、生息地が保たれるための欠かせないイベントなのでしょう。

ところが、川の氾濫を防ぐためにダムや堤防が造られると、大規模な川の増水は減り、新たな土砂が運ばれにくくなりました。これらの河川改修が頻繁に行われた川では、広い河原がみられなくなり、旺盛に成長するヤナギやニセアカシアが目立つようになっています。これは「川の樹林化」とよばれる、多くの川で取り沙汰されている問題です。そこで私たちは、樹林化が川辺の鳥に及ぼす影響を把握するために、十勝川で樹林化と鳥の変化を調査しました。その結果、十勝川・札内川など、ダムが造られた後に樹林化が生じた川では、イカルチドリなどの河原の鳥が減っているとわかりました。この研究内容に関しては、またの機会があれば詳しくご紹介したいと考えています。

氾濫の危険から私たちの生活を守るダムや堤防は、治水の面から必要不可欠なものです。しかし一方で、イカルチドリをはじめとする河原の生き物に大きな危機をもたらしています。河原の生き物たちの暮らしぶりを見てみると、人間活動と生物多様性保全を両立させることの難しさを考えさせられます。

シロフクロウとの出会い

天塩郡遠別町 泊 和 幸

道北では昨年の冬からシロフクロウの報告は数例ありますが、この号の表紙写真を見ていただくとともに、私の観察記録を報告します。

シロフクロウの情報を得て昨年12月21日、午前7時から友人と二人で稚内近辺の探査を開始し、徐々に南下して来ましたが、そう簡単には見つかるものではありません。双眼鏡をのぞいてもまばらな雪の塊ばかり。電柱、立木、道路際の砂山、牧草地、居そうな所を次々に探しましたが確認できたのはケアシノスリ3羽だけでした。

10時頃、稚内市のはずれ、豊富町との境界付近で車を走らせていると「それらしきもの発見」と友人が叫びました。お互い半信半疑で双眼鏡をのぞくと500m程離れた雪山の上に‘小さな雪だるま’のようなものが見え、首が動いたのです。それを確認したとたん、友人と顔を見合わせました。それから撮影機材を背負い込み、ゆっくり時間をかけて前進しシロフクロウがこちらを見ると立ち止まり、それを繰り返しながら1時間30分ほどかけ30~40mくらいまで近寄りました。ここから慎重に撮影しながらシロフクロウにも自分たちの姿を認識してもらい生態観察と撮影を数時間続けました。この日はまったくその場所から動こうともしませんでしたが、日の落ちる前に撮影を切り上げました。

翌朝、昨日の近くを探すと見つかりました。この日は吹雪まじりの悪天候。寒さをこらえ観察を続けると、大きなネズミ位の大きさのペレットを吐き出すのも確認できました。夜中にネズミをたくさん食べたのでしょうか。昨日、じっとして動かなかつたのは多分渡ってきたばかりで疲れていたのだと思います。この日は吹雪いていて薄暗く、夕方と間違えたのか、盛んに餌獲りを繰り返していました。あのおっとりした姿からは想像も出来ないようなすばらし



シロフクロウ 2013. 12. 22 稚内市

い聴力と俊敏な動きにも圧倒されました。100m程離れた所からチュチュと口を鳴らすとこちらを見ます。これが面白くて何度も繰り返すと最後には飽きられてしまいました。

飛び立ったのでレンズで追うと近くまで来て急降下、あまりに速くてたちまちレンズから外れてしまいます。見ると雪煙をあげてネズミを抑え込んでいました。狩の姿をレンズでとらえることの難しさを痛感しました。私たちの見える範囲で短時間のうちに4匹の獲物を捕獲しました。自然界ではあのくらいたくましく俊敏でなければ生きていけないのでしょうか。2日間観察して知ったのは寝顔が可愛いこと、また健康体であれば、狩りがずば抜けて上手いということです。憧れのシロフクロウに会えた事に感謝したいと思います。

【広報部から】泊さんは一昨年、写真集「鷲たちと僕の30年」を出版し、今年3月末に増刷予定です。



野幌森林公園

2013. 12. 8

【記録された鳥】トビ、ハイタカ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、カケス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ、ウソ
以上19種

【参加者】秋山洋子、今村三枝子、笠井好美、川村宣子、栗林宏三、後藤義民、小堀煌治、三歩幸光、品川陸生、高

橋利道、道場 優、戸津高保、富川 徹、中正憲倍・弘子、中田勝義、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、広木朋子、辺見敦子、松原寛直、道川富美子、三井 茂 以上24名

【担当幹事】富川 徹、道川富美子

小 樽 港

2014. 1. 19

札幌市厚別区 近藤 直人

私は近いうちに太平洋側の地域に引っ越しが決まりました。なので引っ越す前に日本海側の海で海鳥をもう一度見たいとおきたくりました。もうしばらくいけないので、とこ

とん観察したいと考えていた私は、色々調べているうちに偶然今回の探鳥会を知る事が出来ました。

去年、私個人で小樽港に行ったとき、双眼鏡で観察できる範囲の海鳥しか見られませんでした。しかし今回はスコップを持ってきてくださった方々がいて、海鳥を見つけると肉眼では点にも見えないような遠くにいる海鳥をレンズ越しにクリアに見せてくださいました。こんなレベルの観察は私個人では絶対にできなく、同じ場所に居ても見ることのできる海鳥の数が圧倒的に違ってくることに衝撃を受けました。

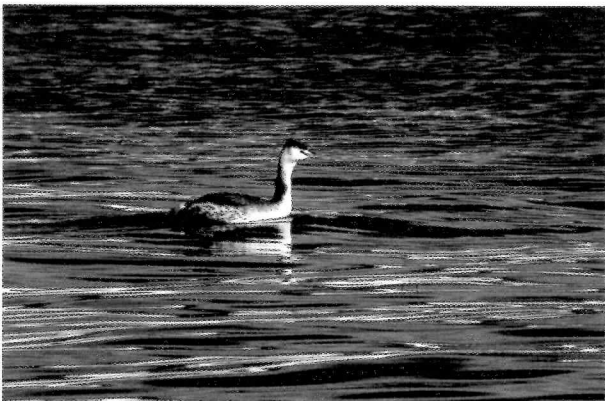
そのおかげで今回の目標だった「ウミスズメ類」をスコップで一気に3種類も観察でき非常に充実したものとなりました。またカモ類自体は少なかったのですが、今回もう一つの目標である「日本海側の海を満喫する」という目標も一気に6か所も探鳥に訪れたことで達成できました。

今後野鳥愛護会で探鳥会があります。今回参加して思ったのは、会員の人たちがやさしいということ、そして野鳥のことについても図鑑には載ってないような色々なことがらを教えていただき、ためになったということです。得るものの多い濃い一日となり、これを機に積極的に探鳥会に参加していきたいと思うようになりました。

【記録された鳥】 マガモ、キンクロハジロ、スズガモ、シノリガモ、ピロードキンクロ、ホオジロガモ、ウミアイサ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、オオハム、ウミウ、ヒメウ、ワシ



小樽港探鳥会風景 日和山



カンムリカイツブリ 参加者撮影

カモメ、シロカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ハシブトウミガラス、ウミガラス、ケイマフリ、トビ、オジロワシ、オオワシ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ツグミ、ハクセキレイ、スズメ、ムクドリ

以上32種

【参加者】 白田 正、梅木賢俊、大坂博記、岡部良雄・三冬、小原幸子、川路則友、栗林宏三、近藤直人、坂井伍一、佐々木恵美子・彩、志田博明、品川睦生、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、高橋きよ子、高橋宣子、高橋貞夫、高橋良直、高正みちえ、田中志司子、田村裕子、戸津高保、中正憲信・弘子、中田勝義、西尾京子、畑 正輔、浜野チエ子、樋口孝城、平野規子、広木朋子、本間康裕、増田とし子、松原寛直・敏子、村田睦子、横山加奈子、渡会やよひ

以上41名

【担当幹事】 梅木賢俊、品川睦生、畑 正輔

野幌森林公園

2014. 2. 2

江別市野幌 松原 敏子

久しぶりに野幌森林公園探鳥会に参加しました。お天気はまあまあ！雪のマークも無し……。参加を決めました。野幌森林公園は我が家から車でほんの10分程度と恵まれた所に住んでいるので、平日もよく鳥見をする私の大好きな場所です。

ところが今年の夏頃から膝の痛みで、歩くのもやっと！で全く情けない状態となり、毎日森に入る夫から度々聞くクマゲラ、フクロウ情報に気持ちは焦るばかり……。この日の朝も夫から「様子を見ながら一番後ろからゆっくり歩くといいよ」と言われていたのですが、気が付くとずーっと前方を歩いていました。好きな事をしていると痛みも一時忘れるようです。笑……。

集合場所に車で向かう途中、とわの森三愛高校の近くの街路樹に100羽前後の小鳥が飛んできました。車を止めてもらい双眼鏡をのぞくとマヒワの群れだ！もう少しゆっくり見たらベニヒワも入っていたのでは？等と段々欲がでてくるのが可笑しかった。

探鳥会は寒さにもめげず参加者も多く、皆さんにお会いできたのも嬉しかった！鳥の数は一寸少ない様な気もするが？……。ハシブトガラが囀りだし、春を感じたり、久しぶりにエナガ、アカゲラ、ヤマゲラ等も見られ楽しい探鳥会でした。街中にはまだナナカマドの実が沢山あるので、レンジャクやアトリも来て欲しいと思って居ります。

【記録された鳥】 トビ、オオタカ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ミソサザイ、マヒワ、ウソ、シメ、カケス

以上20種

【参加者】 秋山洋子、今村三枝子、内山英晋、笠井好美、



野幌森林公園探鳥会風景 出発前の説明

川村宣子、後藤義民、小西扶美枝、坂井伍一、品川睦生、Jacob、Jordan、瀬川 陸、高橋貞夫、辻田捷紀、道場優、戸津高保、富川 徹、中正憲信、畑 正輔、広木朋子、藤田、辺見敦子、本間康裕、松原寛直・敏子、三井 茂、横山加奈子、吉田慶子 以上28名

【担当幹事】松原寛直、横山加奈子

※2013. 11. 10のウトナイ湖探鳥会は荒天のため中止となりました。

鳥民だより

◆ 野鳥写真展と写真募集のお知らせ

会場：札幌エルプラザ 4階多目的スペース
札幌市北区北8条西3丁目

JR札幌駅地下直結または北口出口の北向い

期間：平成26年5月15日(木)～5月28日(水)
9:00～22:00

(ただし初日は11:00から、最終日は16:00まで)

・写真は最近3年以内に北海道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前・撮影者・撮影年月・撮影場所を必ず添付してください。

(原則としてお一人2枚以内とします。3枚以上の場合は展示優先順位を明記してください。)

・5月9日(金)までに、愛護会事務所(北海道自然保護協会内)に送付あるいは直接届けてください。

・5月12日(月)の午後2時から、事務所にて額付・加工・キャプション作成、5月15日午前10時から会場にて展示作業を行います。お手すきの方はご協力ください。

なお、引き続き野幌自然ふれあい交流館で6月に1ヶ月間の展示を計画しております。

お問い合わせは、小堀煌治(011-591-2836)

畑 正輔(011-894-0017)まで

◆ 総会のご案内

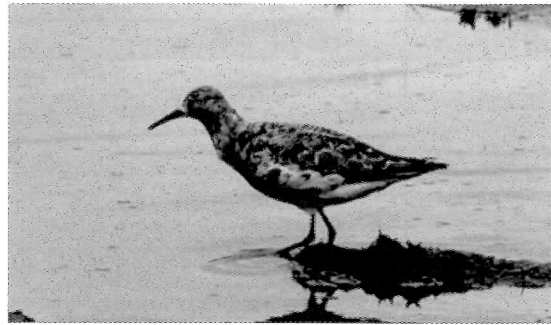
日時：平成26年4月9日(水) 午後6時30分

場所：かでの2・7 110会議室(1階)

総会終了後に懇親会を予定しています。

— 宿泊探鳥会のお知らせ — 5月の十勝

今年は十勝方面で実施します。この時期の十勝は、春の渡りのシギ・チドリやカモ類、草原性の夏鳥に加えて冬鳥も見られ、出現する種はかなりの数になるものと期待されます。



前回の十勝(2008年5月)で見られた
エリマキシギの雄(参加者撮影)

月 日 5月10日(土)～11日(日)

集合場所 札幌駅北口「鐘の広場」

集合時刻 10日午前7時15分

1日目(10日)：札幌→剣山神社探鳥→湧洞沼探鳥

2日目(11日)：(早朝探鳥)→浦幌町十勝太・豊
北原生花園探鳥→十勝エコロジー
パーク探鳥→札幌

札幌帰着 11日午後6時30分頃

定員 45名

参加費用 18,000円(バス代、宿泊代、食事は10日
昼から11日昼まで)

宿 泊 豊頃町茂岩 十勝ロイヤルホテル
電話 015-574-2111

申込み先 佐々木 裕 宿泊探鳥会担当幹事
電話 011-596-2660

※4月1日(火)午前9時から電話で受け付け、定員
になり次第締め切ります。

※午前中は電話が混み合い、お待ちいただくことが
あります。話し中でも、ツーツーツーという音は
発信されませんが受付いたしておりますので、お
かけ直してください。

旅行代金 申込み終了後から4月15日(火)までに
下記口座に振り込んでください。

北洋銀行 札幌駅南口支店

口座名 (株)エイチ・ピー・シー・ビジョン

口座番号 (普通預金) 3790202



- ☀ 探鳥会は悪天候でない限り開催します。
- 👁 双眼鏡などの観察用具、昼食、筆記具、野鳥図鑑などをご持参下さい。
(探鳥地や当日の天候に応じて、防寒衣、雨具、長靴などをご用意下さい。)
- 🚶 公共交通機関を利用される場合には、事前に時刻・時間などをお確かめ下さい。
- ★ 探鳥会の問い合わせ
北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日祭を除く)

開催日	探鳥地	集合場所及び集合時刻
4月20日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 午前9時30分
	中央バス：地下鉄東豊線環状通東駅発(北札幌線東69番・東79番)「モエレ公園東口」下車、徒歩15分。 開水後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しみます。	
4月27日(日)	宮島沼	湖畔 午前10時
	中央バス：岩見沢ターミナル発(月形行)又は石狩月形駅発(岩見沢行)「大富農協前」下車、徒歩10分。 北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
4月29日(火)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	夕鉄バス：新札幌駅発(文京台南町行)「大沢公園入口」下車、又はJRバス：新札幌駅発(文京台循環線)「文京台南町」下車、徒歩各5分。 夏鳥たちが渡ってくる時期です。木々の芽が開き始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
5月4日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	4月29日の案内を参照してください。 木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月6日(火)	藤の沢	白鳥園 午前9時
	定鉄バス：札幌駅発又は地下鉄真駒内駅発(定山溪温泉行又は豊滝行)「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。 藤野マナスル(岡田の山：316m)をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月10日～11日	十勝方面	
	詳細は今号「宿泊探鳥会のお知らせ」を参照してください。	
5月18日(日)	千歳川	さけますふ化場手前の橋付近の広場 午前8時
	交通機関はありません。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミもきっと楽しめます。	
5月25日(日)	鶴川河口	鶴川温泉四季の館 駐車場 午前9時45分
	道南バス：札幌駅前又は大谷地バスターミナル発(浦河行/ペガサス号)「四季の館前」下車。 鶴川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。時にはチュウヒやハヤブサも現れます。	
5月31日(土)	野幌森林公園	大沢口 午後7時
	4月29日の案内を参照してください。 夜の探鳥会です。どんな鳥の音が聞けるか楽しみです。懐中電灯や防虫剤の用意を。	
6月1日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前 午前9時10分
	JR千歳線 植苗駅下車。 鳥の囀りを聞きながら植苗駅からウトナイ湖へ向かいます。道沿いの森や湖畔草原の鳥たちを楽しみます。	
6月8日(日)	厚別川	川下公園駐車場 午前9時
	中央バス：地下鉄東西線白石駅発(川下線白24番)「川下公園」下車。 厚別川の堤防を歩きます。草原の鳥が勢揃いし、林の鳥たちも楽しめます。	
6月15日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	4月29日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月29日(日)	福移	福移小中学校前 午前9時
	中央バス：地下鉄環状通東駅発(北札幌線)「福移小学校通」下車、徒歩5分。 石狩川堤防内外の草原や、石狩川・豊平川合流点の鳥を楽しみます。カワセミも期待されます。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465
HPのアドレス <http://www.aigokai.org>